

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年1月8日(土)

《善いことをするのは神様のため - 祈りと共に、神様に委ねる心を持って - 》

今日の福音(ヨハネ 3:22 - 30)を読むと、一か月くらい前に読んだ福音がよく理解できると思います。『洗礼者ヨハネの弟子たちがイエス様のところに来て、「あなたは私たちが待っている方でしょうか。もしそうでないとなれば、私たちはまた待たなければならないのでしょうか。」という質問をした』箇所(マタイ 11:2 - 11)です。

想像してみてください。ヨハネには縄張りがあったのです。ヨルダン川は、洗礼者ヨハネが洗礼を受けながら悔い改めを求めていたところでした。そしてそこには、洗礼者ヨハネに従いたいと思った人々が集まって来ていました。大勢の人が集まれば、その人たちを整理する係が必要になります。人々を並べせたりする係です。弟子たちは、その仕事をしたのでしょうか。そして、その仕事にやりがいを感じていたのでしょうか。「悔い改めるだけでなく、このように神様のために奉仕ができて、本当に嬉しい。」という気持ちで、使命感さえ持ちながら働いていたのでしょうか。ところがある日突然、30代の若者が現れます。そしてその人に、自分たちの先生であるヨハネがひざまずいて<sup>へりくだ</sup>謙る姿を見せます。その時、弟子たちの心はどうなるのでしょうか。きっと緊張したでしょう。自分たちが先生と違ってついで来たヨハネでさえひざまずいて従おうとするこの人は、どういう人かと思ったでしょう。そして、違和感も覚えたことでしょう。

しかし数日後、その30代の若者、つまりイエス様が、洗礼を受けるために来ます。イエス様がヨハネから洗礼を受ける時、ヨハネの弟子たちはきっと気分がよくなったことでしょう。「この人も私たちの先生に頭を下げて洗礼を受ける」と誇らしく思ったことでしょう。しかし更に数日後には、噂が聞こえて来ます。自分たちの先生から洗礼を受けたその人が、今度は川の向こう岸で、自分で洗礼を受けている、と。そして、自分たちのところに集まっていた人々さえ、そちらへ行ってしまいます。もし皆様がヨハネの弟子だったらどういう気持ちになるのでしょうか。緊張しすぎて憎しみまで感じてしまうかもしれませんね。「なぜ私たちのしていることを全部壊そうとするのか。」「私たちの先生は何も言わないのに、可哀そうだ。」このように思うのが、ふつうの人間の考え方です。弟子たちのそのような気持ちを理解した洗礼者ヨハネは、監獄に入っている間に、「自分はあとどのくらい生きるかわからない」という気持ちで、一番愛している弟子たちをイエス様に直接会わせました。「自分はただ準備する者で、その方の道を整える役目にすぎない。だから直接その方が見せてくださる全ての出来事を見て、その方に従いなさい。」という遺言のような気持ちを持って、弟子たちをイエス様のところに行かせたのです。

皆様よく考えてみましょう。私たちには、この洗礼者ヨハネの弟子たちの心が理解出来ますよね。私たちの姿と似ています。最後に洗礼者ヨハネが、明言を残しています。日本語では「あの方は栄え、

わたしは衰えねばならない。」と表現されていますが、もとの原本の言葉はこんなに文学的ではありません。「あの人は高くなり、わたしは低くならなければならない。」という簡単な言葉です。

イエス様に従います、と言いながら、自分が中心になってしまうと、それは悪魔に負けた印です。悪魔も賢いから、この人はイエスに従おうとしている、と気づいたら邪魔をしようとします。その一番よい方法は、悪魔がその人の生き方に合わせることです。『お前は善いことをして、神様のために今まで一生懸命に頑張ってきたのに、あいつはお前を無視する。だからあいつを殺さなければならない。』と自然に私たちの心を誘うのです。ですから私たちはいつも緊張していなければなりません。善いことをするのは神様のため、という意識をいつも頭に置かなくてはいけません。そうでなければ、私たちは傲慢に陥ったり、人を憎んだり、人を責めようとする癖から、解放されません。

洗礼者ヨハネの弟子たちは、本当に命をかけて洗礼者ヨハネについて行こうと決心したのでしょう。しかし、このような心に陥ったのです。善いことをしようとしても、祈りと共に、そして神様に委ねる心を持ってしなければ、私たちは道を外れてしまう恐れがあるのです。もし全ての信者がそのようなことを意識できれば、分裂とか、悪口などは共同体の中から無くなると思います。しかし、私の耳にはよく悪口が聞こえて来ます。私が一番困るのは、誰かが私のところへ来て他の人の悪口を言うことです。皆様ならば、そのような時にどう返事をしたらよいと思いますか。「あなたが正しくて、あの人が悪いですね。」と言うのがよいと思いますか。皆様は、それを分かっているながら、私に説明しようとするのです。「あの人は、こんなことを話しました。」と。皆様が私ならば、どうしますか。これは人間として仕方がない生き方なのかもしれません。しかし「自分の口から出る言葉が、人を生かす言葉になるように頑張らなければならない」という意識は持ちましょう。「もし自分の言葉によって誰かが被害を受けることになったら、それは絶対に神様のみ旨にかなわないことである」と意識しましょう。

今日の第一朗読(一ヨハネ 5・14 - 21)の使徒ヨハネの手紙の一番前で、全く同じことが話されています。

**「何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。」**

逆に言えば、何事でも神の御心に適わないことならば、神様は絶対聞き入れてくださらない、ということになります。

ありがとうございました。